

令和7年度 学校評価実施状況

京都教育大学附属幼稚園

1. 活動状況

令和8年2月幼稚園評価アンケートを実施

自己評価実施

令和8年2月第1回学校評議員会実施

学校関係者評価実施

令和8年3月幼稚園評価結果及び改善策とりまとめ、学校評価結果及び改善策概要等を保護者へ通知

2. 教育計画（年度重点目標）に関する具体的な取組についての評価

重点目標	(1) 幼児及び保護者との信頼関係を築き、幼児の発達特性に応じた幼児教育を実施する
具体的な取組内容	(1) 一人一人の幼児理解に努め、それを保護者と共有しながら必要に応じて育ちに最適な合理的配慮を実施していく
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	アンケートから約94%の保護者から「幼稚園や担任は、お子様のことを十分に理解している、また、個々の子どもの様子に合わせて、一人ひとりを適切に評価している」という意見が見られたことから、おおむね達成できたと判断する。
学校関係者評価内容	3年間の園生活の総仕上げともいえる子ども劇場では、子どもたちが自らの力で背景や衣装を協同的に制作し、一人一人が考えて観客とやり取りするなど、一つの作品を作りあげる過程を通して、協同性や問題解決力が育っていると感じる。これまで要望が多かった預かり保育の試行は、子育て支援の一環として、保護者に好評であり、将来的には本実施するべきであると考えている。
改善策	幼児の発達を捉え、保護者と共有しながら、保護者からのフィードバックを受入れ、保育の質向上につなげる。また、園の教育方針を家庭と共有したり、親子で参加できる園行事を設けたりなど、ともに子育てを行う仲間であることが認識できるよう、保護者とかかわっていくことで、信頼関係を構築していく。また、預かり保育は継続して行う。

重点目標	(2) 教育目標を実現するための、物的環境、人的環境工夫・見直しを図る
------	-------------------------------------

具体的な 取組内容	(2) 常に目の前の子どもたちの姿を捉えながら、その時々に応じた教育内容が経験できるような環境を常に再構築することで、目標の実現を目指す。
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	幼児の興味関心に合わせて、より遊びが深まり、試したり工夫したりできる環境を整えていった。
学校関係者 評価内容	子どもが発表する子ども劇場では、一人一人が頑張る姿や仲間と一緒に心と力を合わせて、集団の中で自分の役割を意識し、主体的に関わる姿が増えた。また、友だちの意見と折り合いをつけながら活動を進める経験を通して、協同性や問題解決力が育っている。
改善策	結果だけでなく、繰り返し挑戦する姿や過程を具体的に褒めることで、子どもの自信や喜びにつなげていく。こうした日々の小さな成功体験の積み重ねが自己肯定感の獲得につながり、一人のひとりがもつ能力が一層発揮されると思われる。

重点目標	(3) 本園の機能強化課題である小学校との連携、子育て支援の充実を目指す。
具体的な 取組内容	(3)－1 小学校と幼稚園の教員が互いに互いの教育を理解しながら、幼児・児童に何をどう育てていくか話し合う。子どもたちの交流を深め、より良い接続の在り方について探り、実践し、検証していく。
自己評価区分	C：十分には達成できなかった
自己評価内容	幼小の連携を密にし、共通の視点を見出し、互いに幼児児童を理解しながら実践し、振り返りを行いながら接続を図った。
学校関係者 評価内容	附属学校園としていかに連携していくのかについて話し合っていく必要がある。
改善策	本園と附属桃山小学校との連絡進学については、大きな課題が残っている。今年度これまでに例を見ない高い割合で幼児が進学できない事態を重く受け止め、進学できる幼児、できない幼児がクラスに共存する状況の中でいかに連携を進めていくべきか、幼児や保護者の心情を熟慮しながら深く話し合っていきたい。

重点目標	(3) 本園の機能強化課題である小学校との連携、子育て支援の充実を目指す。
具体的な 取組内容	(3)－2 未就園児の遊びの会「ことり広場」を利用する未就園児の親子の姿を理解し、入園児のねらいや配慮につなげていく。
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	今年度「ことり広場」のカリキュラム案を策定したことで、入園までの子

	どもの成長・発達を踏まえて、来年の入園児を迎えることができる。
学校関係者 評価内容	「ことり広場」は地域との連携にもつながる子育て支援である。その子育て支援の発信を強化していくとよい
改善策	ことり広場における親子の触れ合いの様子を SNS を活用して広く社会に発信していく。

3. 附属学校園の機能向上に関する具体的な取組についての評価

重点目標	(1) 教育研究活動の成果を公表する。
具体的な取組内容	(1) 全国幼児教育研究集会の近畿ブロックにおいて、保育を公開し、研修会を開く
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	11月28日に開催した「幼児教育を考える協議会」では、全国幼児教育研究集会の近畿ブロックの会員を招待し、保育を公開した。講演会（京都市立楊梅幼稚園長、外菌知子先生）も開催し、グループ協議では活発な意見交換が行われた。平日開催としたため、現役で担任を持っている他園の先生方の参加が難しく、管理職の参加が多かった。
学校関係者評価内容	イチョウが黄葉する季節の中での公開保育だったため、自然とかわる本園独自の保育スタイルを公開できたのはよかった。
改善策	平日開催であったため、担任を持っている先生方の参観が少なかったこと、大学教員の授業日程と重なったこと、などから、土曜日開催が好ましいと思われる。

重点目標	(2) 大学と附属学校園とが連携した研究を実施する。
具体的な取組内容	(2) 大学主催の幼稚園・保育園・こども園との協働研修において大学と協力しながら保育を公開し、研修会を開く
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	6月11日に開催した協働研修では、神戸市立六甲道児童館の金坂尚人先生を招いて、参加者がどろだんごをつくるワークショップを行った。その日は大雨警報が出ていて保育の公開はできなかったものの、府内外から集まった参加者が意欲的にワークショップに参加する姿が見られ、充実した学びの場を提供することができた。
学校関係者評価内容	幼稚園に限らず、保育形態が異なる多くの保育者が日ごろの悩みを持ち寄り、よりよい保育を目指す協働研修は、今回実践的内容を伴うことで例年以上に充実していたと感じる。今後も附属ならではの研究・研修を進めていくことが大切である。
改善策	大学と連携することで、幅広い分野の専門家とつながるメリットを最大限に活かし、地域の幼稚園とも協働的な研究・研修となるような機会をもっていく。

重点目標	(3) 総合教育臨床センター学びサポート室と連携する。
具体的な取組内容	(3) 学びサポート室から講師を招き、保護者向けに子ども理解に関する講演会を開く。

自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	学びサポート室から講師を招き、講演会を開いたことで、発達に対する保護者の意識や、「学びサポート室」への理解が高まったことで、子育ての悩みを相談する保護者が増えてきた。
学校関係者 評価内容	一人一人の発達に応じた保育を行うことができるよう、支援が必要と思われる子どもの保護者には学びサポート室で相談することを勧め、幼児理解を深めていくとともに子育て支援にも貢献することができた。
改善策	引き続き、学びサポート室と連携しながら、子ども理解を深め、子育て支援につなげていく。

重点目標	(4) 業務改善及び教職員の働き方に関する取り組みを推進する。
具体的な 取組内容	(4) 園務の効率化・情報化と共に、学校行事や教職員の役割分担を見直し、園業務の適正化を図る。
自己評価区分	B：概ね達成できた
自己評価内容	園務分掌を明確にし、行事ごとにその行程表を作成することで、業務を明確にし、分担できるようになってきた。
学校関係者 評価内容	業務が見える化することで、教職員の負担軽減につながる。AIなどを有効利用することも考えるとよい。
改善策	引き続き業務の見える化を進めていくとともに、働き方については、今つけている超過勤務記録簿を有効に活用し、見通しをもって仕事ができるように働きかけていく。